ESCAPE TOKYO

大都市に負けない地方企業の「想い」と「存在価値」を発信！

地方にスポットをあてた新しい求人広告、はじまる。

掲載例

1記事、約3000文字というボリュームのある文章と約7枚の写真、今まで伝えきれなかった想いを伝えます。

※掲載文例は文章のボリューム感をイメージして頂くものです。文章のテイストや写真点数など実際と異なる事がございますので、ご了承下さい。

猪のデザインって？

酪農専門の人材派遣会社を経営されている清水さん。とはいえご自身も依頼先に出向き、早朝４時から酪農業務に携わっている。内房を拠点に活動している清水さんと、外房の『なみわい』が打ち合わせ。だから房総半島のちょうど中間地点の３０キロ走行だった訳だ。納得。酪農家さんからのご依頼。一体何だろうか？？

清水さん。実はもうひとつの顔があって、「ViVi's キッチン」というブランド名でドッグフードの製造販売を営んでいる。ただ、その原材料となる肉は猪と鹿の肉なのだ。今、全国で問題視されている野生鳥獣による作物被害。房総半島に於いても年々被害が急増しているとのこと。現状、地元の猟師さんがその駆除にあたっている。最近よく耳にするジビエ。そういった食肉に加工する施設を持たない地域では、それが当たり前のようだ。

「山間部に暮らす人たちにとっては深刻な問題なんです。動物たちにとっても、それは人間が作った環境による止むに止まれずの行動。農作物を荒らすことで『有害獣』とされ駆除される。そんな猪や鹿の命も尊い。猟師さんだって心を痛めています。そんな現状を目の当たりにして、どうにかこの動物たちの命を尊重できないかと。そこで考えたのがドッグフードなんです。」

普通ならドッグフードの加工会社などに依頼すると思いきや、清水さんは自ら駆除された動物たちの血を抜き、解体処理をする。そして加熱処理。そして真空パック。手作りの『ViVi's キッチン』のシールを貼って完成。そこまで全てひとりでやっているのだ。

ここまでの話に聞き入ってしまった。さて肝心の依頼内容は .....

「パッケージもチラシも全部素人の私の手作り。だからカッコよくしたいんです。売れるためでもビジネス拡大のためでもなく、この現状を知ってもらうためにカッコよくしたい。」

パッケージやチラシをカッコよくするのは容易かもしれない。でも『なみわい』はこの清水さんの志や活動こそブランディングするのが、この現状の理解を広める術だという。

何だかみなさん盛り上がっている。その輪に私も入りたくなった。

今日はここまで。それぞれ宿題を持ち帰り、これからの『ViVi's キッチン』に向けて発進だ。

つまりは『覚悟』につきる

あっという間に夕方だ。外房だから陽は海から昇り、山の方へと沈む。

猪をデザインする訳ではなかったが、この地特有の生活に密接したデザインに触れたような気がする。

これからもうひとつ案件打ち合わせがあるらしい。でもそれは極秘案件。できてからのお楽しみってことで同行はダメだと言う。同席ワクワクだったのに、早々上総一ノ宮の駅で降ろされた。（ちっ）

お約束のビールを買って、帰りの『わかしお』が来るのを待ちながら今日一日を振り返った。

『なみわい』という会社

なみわい。

この小さな会社パンフレットに、ひらがなで『なみわい』。これが会社の名前。本日のご依頼主である。なんとも可愛くやさしさを感じる。「デザインの力で町を元気にしたい！」そんなスローガンのもと、４人様々なジャンルのクリエーターが発起人となって立ち上げた会社。設立は 2016 年４月。まだできたてホヤホヤの会社だ。会社はフレッシュだが、メンバーそれぞれはかなりコアだ。

面白いのが、みなさん『なみわい』の一員でありながら個人事業主でもあること。ウェブや広告をはじめ様々なデザイン。トートバッグやエプロンなどの生活雑貨の製造販売（←このアトリエの家主）。カメラマン。イラストレーター。ぬいぐるみ作家。などなど。様々な顔を持つ４人が、案件ごとにチームを組んで動く。そのチーム編成は複雑で色々なチームが重なり合っている。基本リモートワークで本社的なものはなく、それぞれがそれぞれのスタイルで仕事をしている。ただ、週一くらいはお互い元気かどうかの安否確認も含めて、このアトリエに集合するらしい。愛犬や子供同伴の時もある。（今日は子供同伴の日。）

そんな多種多様、勝手気まま な人たちではあるが、ひとつだけ共通点がある。それは全員が移住者だということ。

メンバーの荒川慎一さんと佐藤 有さん。

「僕たちは夫婦で『D-KNOTS』とうデザイン事務所を運営しています。かつて同じデザイン会社で、寝夜問わずひたすら仕事漬けの日々でした。そしていざ独立。独立という自由は責任と不安とセットなので（笑）、それらを払拭すべくとにかくがむしゃらでした。自分たちが選んだ道とはいえ、これからの将来を考えた時にこのままの生活・仕事でいいのかという疑問が生まれはじめたんです。結婚を機に、そしてこれから生まれくる子供のことを考えて、このまま走り続けていいのかって。そこで浮上したのが地方への移住でした。とは言っても、クライアントは東京。全てを捨てての移住は無理。程よい距離感が重要でした。１時間そこそこで東京にも行けて、自然豊かな環境。そして海。まさに打ってつけの場所がここだったんですよ。それで隣町『いすみ』の移住を決めたんです。ただ東京にも拠点を置いています。やっぱり東京も好きなもんで ... 所謂、二地域暮らしですね（笑）東京は仕事の場。こっちは暮らしと仕事。子供もここ生まれのここ育ちです！」

このアトリエの家主である西田猟人さんは、カメラマンの顔も持つ。なんと、ブログがきっかけで写真が仕事になったと言う。福岡由佳さんは、金融関係出身でビラティストレーナーの資格を持つ。移住後に一念発起して独学でウェブデザインを学び、今では講師をするほど。

なんともバラエティにとんだ『なみわい』である。

仕事は違えど、みなさんそれぞれの選択が『移住』だったようだ。

移住歴 11 年目の人。浅い人でも６年目。この地に暮らし、この地で働き出して の年月。それぞれの経験や体験を持ち寄っての『なみわい』なんだろう。地方で暮らす・地方で働く。まさにエスケイプ東京にうってつけな会社だ。これから面白い話が聞けそうだ。と思ったら、なんとこれから打合わせだと言う。

「同席してもらえれば、ぼくらの仕事の内容や環境がわかってもらえると思いますよ。」

滞在時間２０分。また車に放り込まれる。近くだからと言ったわりには車で２０分。距離にして３０キロはある。交通網が発達しているわけではない。田んぼが広がり、信号は鎌倉。猪に注意の標識の方が多いんじゃないか？

しかしこれからはじまる打合せが、そんな猪にまつわる打合せとは想像もつかなかった。

デザインと猪？　デザインで猪？　猪をデザイン？　一体何がはじまるのだろうか。

今回は、千葉県・外房を拠点に、ウェブ / 広告 / 写真 / ブランディング / プロダクト / 卒業アルバム ... 様々なジャンルのデザインを手がける会社『なみわい』の即戦力スタッフの募集です。

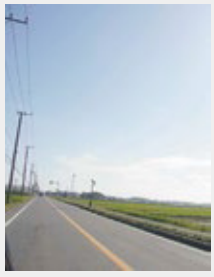
『なみわい』は移住者４人が集結して起業。キーワードは「覚悟」。とは言っても、『なみわい』流『覚悟』とは、地方で暮らす・働く心得のようなもの。何ともゆる〜い環境の中、“真面目に楽しむ” をモットーに、日々邁進している、そんな『なみわい』にお邪魔して来ました。

まずは太平洋を拝む

『田舎（いなか）』という言葉には、２種類の意味がある。ひとつはのどかな田園風景広がる、自然豊かな環境のこと。もうひとつは誰しもが持つ、生まれ育った故郷を言う。とは言え、大阪ミナミを『故郷＝田舎』とはなかなか言いづらい大阪出身の私である。こうして眺めている車窓の先に広がる風景こそが、まさに『故郷＝田舎』の方程式にぴったりである。東京駅から乗り込んだ特急『わかしお』の車窓からの風景を眺めていて、ふとそんなことを思った次第である。

『わかしお』と言うくらいだから、目指すは山ではく海なのは承知。東京駅を出発し、すぐに夢の国ディズニーランドが現れる。東京湾・内房をかすめてひたすら東へ東へと走る。目指すは外房。走ること１時間。山や田園風景を眺めて、眼下に広がる太平洋を今か今かと待ちわびる。どうもこの海に対するワクワク感は、いくつになってもかわらないものだ。ビール飲みながらの小旅行といきたいところだが、残念。本日はお仕事。

ビールは帰りの『わかしお』までお預けだ。そんなこんなで『上総一ノ宮駅』。漸く外房の海の駅に到着した。



都心では今やどこの駅に降り立っても、同じ商業施設やコンビニに出迎えられるが、ここにはそんな風景などありゃしない。コンビニのかわりに、地元魚屋さんが営む定食屋兼土産屋さん。駅前は駐車禁止！的なことは暗黙のルールで、みんな誰かしらのお迎えで到着を待っている。斯く言う私もそんなひとりで、早速声をかけられ挨拶もそこそこにそのままお迎えの車に乗り込んだ。

漸く一軒のコンビニが現れるも、その向こうにはこれまた一面の田んぼが続く続く続く。

「この一本道の行き着く先が太平洋、外房の海ですよ。」

この言葉にまたもや気持ちは高ぶる。話の通り、ものの数分で太平洋にぶつかった。１８０度広がるは太平洋。一宮海岸だ。大きく胸を広げて深呼吸。お決まりの自然堪能なひとコマ。

これといって海に用がある訳でもないが、こちらのおもてなしとして、この外房の海・太平洋を拝んでもらうのが常のようだ。これは実に良い。これが都会の雑踏をリセットしてくれる。

そんなセンセーショナルなはじまりで、ここ外房の一日がはじまったのであった。

海を眺めた後は、そのまま一宮海岸からすぐのところにあるアトリエ？店？何ここ？なところに連れてこられた。奥には作業台やミシン。たくさんのトートバッグが並ぶショールーム。デッキの向こうには、様々な植栽積わる庭が広がる。カッコよくいえばカリフォルニア風だが、間違いなくここは千葉・外房。ただゆる〜い時間と空気とメローな BGM が流れている。今日の取材者のひとりのアトリエらしい。はっきり言って、仕事の場というより脱力の場だ。海を見て都会の雑踏をリセットしたにしろ、この環境はあまりにもゆるく、ビールが恋しくなる。

本日の取材。どんな展開になるのか全く見当がつかない .....

作る人

ESCAPE TOKYO

代表取締役

木戸　卓樹

人材紹介会社勤務
上京
飲食業バーテンダー
ホテルマン
フランス料理店ソムリエ
渡仏
帰国後
飲食店コンサルティング事業経営
人材事業採用責任者
そして今

事業を通し、今の東京に住む若者は、地方で生活したい・移住したいと考えている人が徐々に増えている事を感じていた。

しかし、地方移住のボトルネックである仕事を探そうにも、東京では地方に眠る質の高い求人情報を目にする事は殆どない。故に仕事が無いと思い込み、一歩踏み出す勇気が持てないのが現状。

そこで高橋と出会い、地方の中小企業には、即戦力となる良い人材にリーチする機会が殆どない事を知る。このギャップを埋めたい。それが「ESCAPE TOKYOの始まりである。

最高執行役員

高橋 久仁郎

郵便局窓口業務
秘境専門旅行会社勤務
飲食会社勤務
飲食会社役員
ブライダル会社役員
飲食会社勤務
一宮に移住しオーベルジュ経営
そして今

東京から千葉の一宮に移住し、オーベルジュを5年経営していたが、人材募集をかけても、良い人材が地方には中々集まらないことを実感。そもそも、東京に沢山集まっている優秀な即戦力に対して地方の中小企業がアプローチするメディアが殆ど無い事に気づく。

今、ここを解決する仕組みを作ること、これが世の中に必要とされている事、本当の地方創生につながる事だと感じ、木戸とタッグを組み「ESCAPE TOKYO」を立ち上げた。

ESCAPE TOKYO

株式会社 ESCAPE TOKYO
東京都東京都新宿区新宿
４－３－１７
FORECAST 新宿 SOUTH 6 F

www.escape-tokyo.com